西国33所観音霊場　琵琶湖周辺　旅

4月5日

９：００　ホテル ピアザびわ湖　迎え　ジャンボ観光タクシー

ホテル　⇒　比叡山東塔地区　⇒　西塔地区　⇒　横川地区

⇒　京都大原　(三千院　・　寂光院　・ほか）　⇒　JR京都駅

⇒　(高速バス）　⇒　関空

４月５日(木)　９：００～１６：００（７時間貸切予定）
７時間以内の貸切
￥４３,８６０　＋　諸費用(通行代・駐車場代・拝観料・高速代など）
延長の際は３０分につき、￥２,５８０の追加

滋賀エムケイ株式会社　　山崎　豊
〒520-0861　　滋賀県大津市石山寺４丁目２番２７号
TEL：０７７－５３１－２００１

京都駅八条口　16:10　⇒　　17:38　関西空港第1ターミナル
京都駅八条口　16:40　⇒　　18:08　関西空港第1ターミナル
京都駅八条口　17:00　⇒　　18:28　関西空港第1ターミナル

関西国際空港　19:25　ANA1709便　⇒　20:40　福岡空港

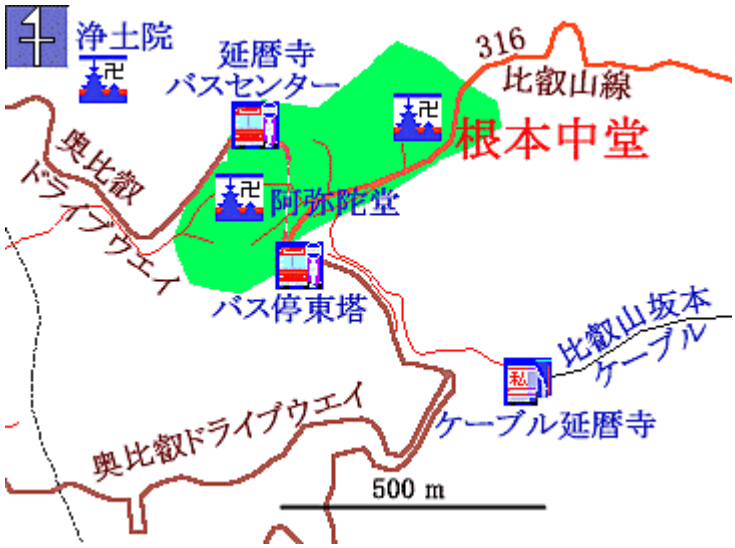
比叡山延暦寺は天台宗の総本山であり、比叡山頂から東側斜面にかけて、
三塔十六谷三千坊と言われるほどの大寺である。
三塔とは「東塔（とうどう）」、「西塔（さいとう）」、「横川（よかわ）」の各エリアを指している。
近江国分寺で得度し奈良東大寺の戒壇院で具足戒を受けた最澄上人が、理想の布教地を比叡山に求め、延暦7年(788年)に山上に庵を結び、自ら刻んだ薬師如来像を本尊として安置し、「一乗止観院」と称したのが延暦寺の創始であると伝えられている。

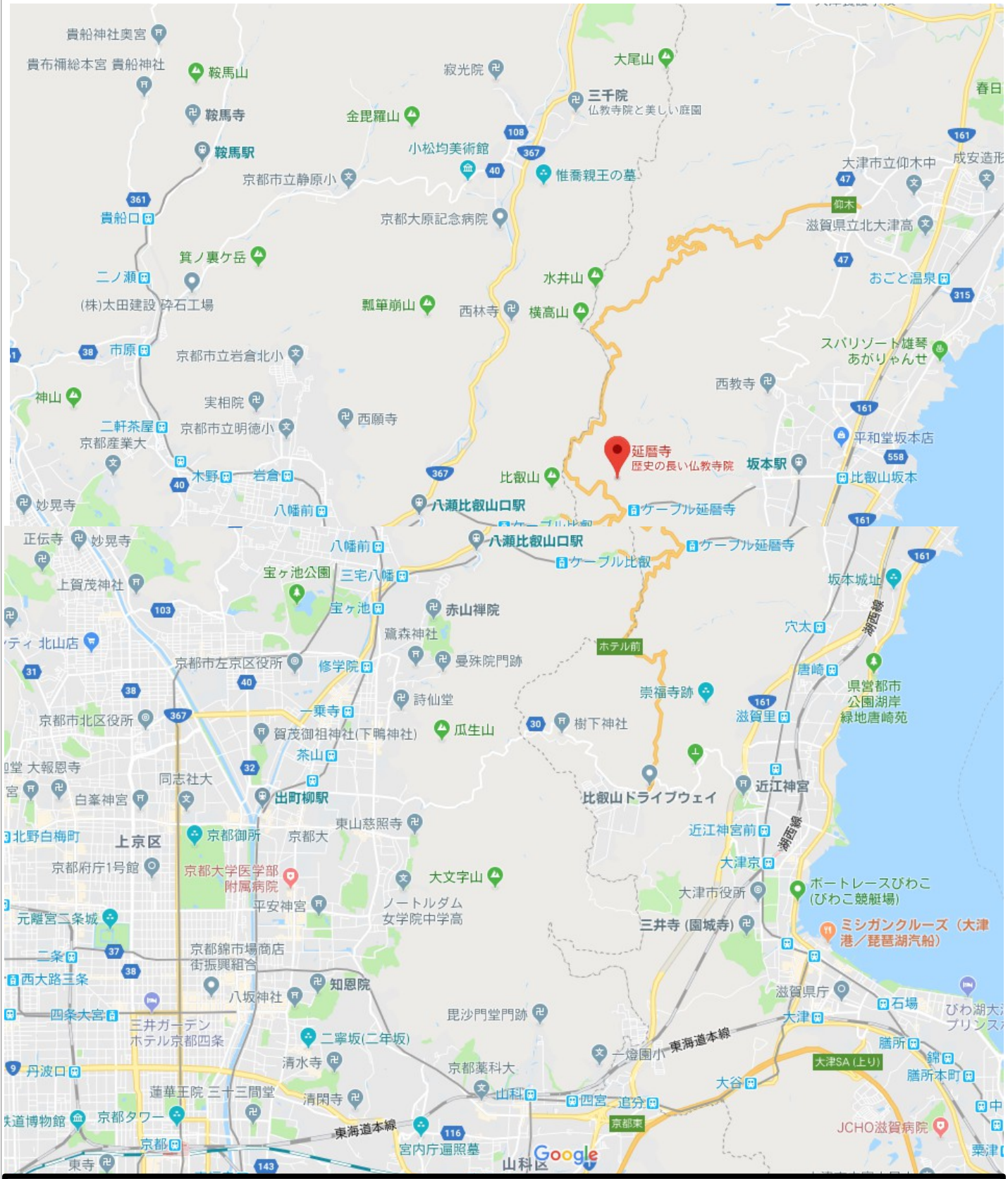
桓武天皇の平安遷都に伴い、御所の鬼門の方向にある最澄上人の草堂が国家を鎮護するための官寺に選ばれ、最澄上人は天皇のための侍僧の一人に加えられたという。

最澄上人は延暦23年(804年)に唐に渡り、翌年に帰国する。帰国後、天台宗を開き「一乗止観院」を「根本中堂」に改称したとされている。この頃から、高野山を開いた空海との間に確執が生じ始めたようである。

現在の寺名「延暦寺」に改名されたのは、最澄上人没後の弘仁14年(823年)であるとされている。その後、他山の僧兵との争い等で、しばしば多くの堂を焼失したが、その度に復興されてきたようである。

最澄上人のあと、比叡山から数多くの名僧、高僧を輩出しており、法然、親鸞、道元、日蓮など著名な僧もすべてここで修行したといわれている。最澄上人と対立していた空海のもとからは高名な僧が殆ど輩出していないのと比べ対照的である。
元亀2年(1571年)には織田信長の軍勢によって比叡山全山すべて焼き払われた。建物で残ったのは西塔にある瑠璃堂のみといわれており、僧侶、それに坂本の町から逃げてきた一般の人合わせて二千人以上の人々が焼殺、惨殺されたという。その後、秀吉、家康によって寺は復興された。しかし、その傷跡は実に大きかったようで、信長に対する恨みは、1994年の法要で表面的には一応解消したことになっているが、今でも比叡山は神秘的で怖いというイメージは残っているようで、このイメージは将来にわたっても消え去ることはないであろうといわれている。





根本中堂だけでも1時間半。
国宝殿もじっくり見学したいのであれば、最低でもプラス30分の合計2時間

東塔の近くにあるのが西塔。
このエリアには重要文化財に指定されている、法華堂・堂行堂・釈迦堂があり
所要時間は30分程度で見てまわれます。
横川エリアはおみくじ発祥の地といわれる元三大師堂などがあり、
ここではおみくじのルーツを勉強したり、おみくじを引くこともできます。所要時間は30分程

比叡山延暦寺

比叡山延暦寺は、世界の平和や平安を祈る寺院として、さらには国宝的人材育成の学問と修行の道場として、
日本仏教各宗各派の祖師高僧を輩出したことから、「日本仏教の母山」と仰がれています。
また比叡山は、京都と滋賀の県境にあり、東には日本一の大きさを誇る琵琶湖を眼下に望み、
西には古都京都の町並を一望できる景勝の地でもあります。
このような美しい自然環境の中で、一千二百年の歴史と伝統が世界に高い評価をうけ、
平成６年（1994）にはユネスコ世界文化遺産に登録されました。
比叡山へは、坂本ケーブルやドライブウェイも完備し、諸堂拝観はもとより、自然散策や史蹟探訪にと
気軽に親しんでいただくことができます。
料金　大人700円　　※三塔共通券

根本中堂

　東塔地区における中心的な建物は延暦寺の総本堂にあたる「根本中堂」である。
現存する建物は寛永17年(1640年)に建造されたものといわれ、最澄上人の時代から数えて八代目の建物になるらしい。「根本中堂」は日本で三番目に大きい木造建築であるといわれている通り、その規模の大きさに驚かされる。

　内陣須彌壇の上、中央の厨子内に最澄上人の作とされている本尊の薬師如来が安置されているといわれているが、秘仏であり直接の拝観はできない。尤も内陣は非常に暗く、仮に厨子が開扉されていたとしてもその内部を見ることは不可能であろう。
内陣は外陣や中陣より低い位置にあり、石敷きの土間である。参拝者が入ることのできるのは中陣までである。

　「根本中堂」は国宝に指定されている。

不滅の法灯

本尊の前には菊の紋章の描かれている六角形の三個の釣灯籠があり、菜種油が燃焼するほのかな光を放っている。これが延暦寺創始以来1200年間消えたことがないという「不滅の法灯」である。法灯は周囲の暗さのなかで実に神秘的な雰囲気を醸し出している。中陣正面横に座っているとこの雰囲気に引き込まれのは私だけではないであろう。　但し、厳密に言えば、「不滅の法灯」が1200年間消えたことがないというのは正しくない。というのは上述したように約430年前、信長の軍勢により根本中堂も焼き払われており、この時に「不滅の法灯」も当然消えている。山形の立石寺（山寺）には根本中堂から分灯されていた「法灯」があり、この灯を持ってくることにより「不滅の法灯」を継続させたという。
延暦寺では三塔即ち東塔・西塔・横川にそれぞれ中心となる仏堂があり、これを「中堂」と呼んでいますが、東塔の根本中堂はその最大の仏堂であり、延暦寺の総本堂となります。本尊は薬師如来です。
延暦寺を開いた伝教大師最澄が延暦７年（788）に創建した一乗止観院（いちじょうしかんいん）が元であり、その後何回も災害に遭いましたが、復興の度に規模も大きくなりました。
現在の姿は徳川家光公の命で寛永19年（1642）に竣工したものです。ご本尊の前には、千二百年間灯り続けている「不滅の法灯」も安置されています。 建物は国宝に指定されています。廻廊は国重要文化財に指定されています。

文殊楼(もんじゅろう)
文殊楼は高い石段を隔て根本中堂の東側にあります。
延暦寺の山門にあたり、徒歩で本坂を登ってくると、まずこの門を潜ることになります。
慈覚大師円仁が中国五台山の文殊菩薩堂に倣って創建したものですが、寛文８年（1668）に焼け、その後建てられたのが現建築です。
この「文殊楼」は比叡山の総門の役もしているという。
　ここには中国五台山の霊石が埋められているといわれている。急勾配の階段を上がった楼上には文殊菩薩が祀られているが、内部は雑然としており、何となく埃っぽい。

大講堂
昭和39年（1964）に山麓坂本の讃仏堂を移築したものです。朱塗りも鮮やかで見た目にも新しい建物である。本尊は大日如来で、その左右には比叡山で修行した各宗派の宗祖の木像が祀られています。
また、外陣には釈迦を始めとして仏教・天台宗ゆかりの高僧の肖像画がかかっています。国重要文化財に指定されています。
根本中堂の西側に「大講堂」が建っている。ここは僧侶の学問修行のための道場とされている。
　「大講堂」の本尊は大日如来であり、脇には聖徳太子、桓武天皇をはじめ、法然、親鸞、道元、日蓮など、一宗の祖師の木像が安置されている。

阿弥陀堂
昭和12年（1937）に平安時代の建築様式をモデルとした建立された、滅罪回向の道場であり、全国壇信徒各家の先祖を祀っている。
本尊は丈六の阿弥陀如来です。一般の方々の回向法要もしております。
お堂の前には、水琴窟があり、美しい響きを聞くことができます。

戒壇院
　大講堂の西側、一寸した高台の上に「戒壇院」が建っている。
　ここは、天台宗の僧が住職になるための必修の条件である大乗戒（規律）を受ける堂で、年に一度授戒会が行われる。このためか「戒壇院」比叡山中でも最も重要な堂の一つであるとされている。
　最澄上人が大乗戒壇院を建立すべく心血を注いでいたが、存命中は実現せず、最澄の死後7日目に嵯峨天皇より勅許が下ろされ、堂は天長5年(828年)に第一世義真座主により創建されたといわれている。
　「戒壇院」は重要文化財に指定されている。

法華総持院東塔
昭和５５年に阿弥陀堂の横に再興されました。
「法華等持院」は「東塔」、東塔の更に西側にある「潅頂堂」、「寂光堂」などから構成されている。伝教大師最澄は日本全国に６か所の宝塔を建て、日本を護る計画をされましたが、その中心の役割をするのがこの東塔になります。
本尊は大日如来をはじめとする五智如来が祀られており、塔の上層部には仏舎利と法華経が安置されています。

万拝堂と一隅会館
万拝堂は根本中堂大坂を登ったところにあります。日本全国の神社仏閣の諸仏諸菩薩諸天善神を勧請し、合わせて世界に遍満する神々をも共に迎えて奉安して、日夜平和と人類の平安を祈願している平成の新堂です。
一隅会館は、参拝者のための無料休憩所です。休憩所内には、比叡山全景の立体模型が設置されていて、比叡山が進めている一隅を照らす運動の実践や、延暦寺を紹介する映像を放映しています。地下におそば屋さんを併設しています。

大黒堂
一隅会館前の広場に面しています。伝教大師最澄が比叡山へ登った折、この地において大黒天を感見したところであり、日本の大黒天信仰の発祥の地と言われています。 本尊の大黒天は、「三面出世大黒天」と言われ、大黒天と毘沙門と弁財天が一体になった姿をしています。

正覚院不動（延暦寺会館前）
東塔東谷において「灌頂（かんじょう）」という天台密教における重要な儀式を行う道場でした。
現在はその跡地に延暦寺会館が建てられ、その前に正覚院に祀られていた不動尊を安置し、ご参拝、ご宿泊の皆様の旅行安全・厄難消除の不動尊として信仰されております。

山王院

戒壇院横の道を西塔の方へ進と奥比叡ドライブウエイの上にかかっている陸橋があり、これを渡ると木立の中に「山王院」）が見える。

ここは、第六祖智証大師圓珍の住居であったとされている堂で、千手観音像を祀っているので千手院とも呼ばれている。他の堂宇から離れ孤立して建っており、古色蒼然とした裏寂しい感じのする堂である。

浄土院

山王院横の杉木立の間の参道を下ると「浄土院」の前に出る。

浄土院は最澄上人（伝教大師）の御廟（墓）のある場所であり、周囲は非常に静寂で、ここは比叡山第一の浄域とされている。

左の写真中央に見えているのが浄土院の山門であり、その奥の建物が「浄土院拝殿」である。

浄土院拝殿

左の写真は「浄土院拝殿」である。通常、浄土院の山門は閉じられており、拝殿の前に出るには山門の左手にある小さな通用門をくぐって塀の中に入る。

「浄土院拝殿」の奥に「浄土院御廟」があり、弘仁13年(822年)に山内の中道院で56年の生涯を終えた最澄上人（伝教大師）の遺骸が奉安されているという。

正面から見た「浄土院御廟」である。

浄土院御廟

浄土院で御廟に仕える僧侶のことを侍真と言うらしいが、侍真は12年間山籠もりをし、早暁から薄暮まで、掃除、読経、学問の仏道修行を行うという。

侍真の修行期間が長いだけ、有名な「千日回峰修行」に匹敵する大変な修行と思われるが、何故か、一般にはこの修行についてあまり知られていないようである。

国宝殿と文化財

延暦寺には建造物も入れて10件の国宝、64件の重要文化財が所蔵されており、建造物を除く彫刻、絵画、書跡などは、大講堂の北側に建てられている「国宝殿」で随時公開されている。

国宝で著名なものとしては、最澄の唐での通行許可書にあたる「伝教大師入唐牒」、最澄が唐の龍興寺で求得した経典や法具などの目録である「伝教大師将来目録」などが知られている。

重要文化財に指定されている多くの仏像、絵画、書跡も公開されているが、仏像では、「不動明王二童子立像」、「千手観音立像」などがよく知られている。

驚くことは、これら文化財の保存状態が極めて良好なことである。「伝教大師入唐牒」などは1200年の歳月を経ているものには見えない。それにしても、全山を焼き尽くしたという信長の軍勢から如何にしてこれらを全く無傷のまま護ったのであろうか。

延暦寺・西塔地区

椿堂

西塔地区に入って最初の堂は「椿堂」である。参道の下にあり、寂しく、不気味な感じのする小さい堂である。

常坐修行は90日間を一期として一日も休むことなく坐禅して坐り続ける修行という。このような堂での修行は寂しさと不気味さを伴う過酷なものであろう。

かつて、聖徳太子が比叡山に登ったときに、使った椿の木の杖をここにさして置いたところ、芽を出し大きく育ったところから、この堂を椿堂と名付けられたとされている。堂の左手に椿の木が植えられているが、これは聖徳太子の杖から芽を出した木ではないだろう。

にない堂

椿堂の上の参道を北の方に進むと、渡り廊下でつながった二つの堂がある。

両堂とも写真手前が正面になるが、向かって左の堂は「常行堂」、向かって右の堂は「法華堂」である。両堂を合わせて通称「にない堂」と呼ばれている。

「にない堂」の呼び名は弁慶が渡り廊下を天秤棒にして両堂を担いだという伝説に基づいているといわれている。

「法華堂」の本尊は普賢菩薩、「常行堂」の本尊は阿弥陀如来である。

「法華堂」、「常行堂」ともに重要文化財に指定されている。

「にない堂」では『四種三昧行』という修行が行われるという。四種三昧は常坐、常行、半行半坐、非行非坐からなるといわれ、常坐は90日間、食事とトイレを除き一日も休むことなく坐禅し続ける行であり、常行は90日間、本尊阿弥陀如来の周りを歩き続ける行とされている。何れにしても『四種三昧行』は過酷な修行である。　「にない堂」全体が赤色に塗られており、派手な感じがする。一見しただけでは上述のような過酷な修行が行われる堂とはには見えない。

釈迦堂

「にない堂」の渡り廊下の下をくぐり少し進むと、石段下に西塔地区の中心の堂である「釈迦堂」が見える。

この堂は貞和3年(1347年)に建てられた園城寺の弥勒堂を、織田信長の比叡山焼き討ちの後、豊臣秀吉の命で文禄4年(1596年)に、ここに移築したものであるとされている。

「釈迦堂」は天台様式の典型な堂々とした風格のある建物で、延暦寺に現存する建物では最古のものらしい。

1998年9月近畿地方を襲った台風により、西塔地区はかなりの被害を被り、釈迦堂裏側の杉の大木が堂の上に倒れ、屋根二ヶ所が大きく損傷した。

その後、釈迦堂屋根の修復工事が行われ、完全に復旧された。

瑠璃堂

「釈迦堂」の左横の山道を通り、ドライブウエイに出、それを横断して北の方角に進むと「瑠璃堂」がある。

「瑠璃堂」の名前の由来は、薬師瑠璃光如来が堂内に安置されていることに基づくようである。

「瑠璃堂」は信長の比叡山焼き討ちを免れた唯一の堂宇であるといわれており、重要文化財に指定されている。

親鸞聖人修行の地

「にない堂」の手前、「にない堂」に向かって参道の左側に「親鸞聖人ご修行の地」の石碑の建った場所がある。

詳細はわからないが、かつて、親鸞はこの場所で修行したのであろう。

延暦寺・横川地区

横川中堂

「横川」バス停から参道を東に進むと、最初に目に付く大きな建造物は、石垣の上に建っている朱塗りも鮮やかな舞台造りの「横川（よかわ）中堂」であり、横川地区の中心となる堂である。

横川は最澄上人の教えに従って、慈覚大師円仁が開いたといわれる場所である。

その円仁が嘉祥元年(848年)に根本観音堂として創建したとされるのが横川中堂である。

他の堂宇と同様、元亀2年(1571年)、織田信長による比叡山の焼き討ちにより、横川中堂も全焼したようであるが、後、豊臣秀頼により再建されたといわれている。その後、昭和17年(1942年)に落雷により焼失、現存の堂は昭和46年(1971年)に建造されたものという。それだけに堂の外観は新しく、朱色の塗装も鮮やかであり、歴史のある寺としては何となく違和感がある。

「横川中堂」の本尊「木造聖観音立像」は不思議なことに度重なる火災の難を免れているというが、その表情は柔和で多くの苦難を経ているようには思えない。

本尊「木造聖観音立像」は平安時代の作といわれており、重要文化財に指定されている。

根本如法塔

「横川中堂」の西北側、参道から細い坂道を登ったところの木立の中に朱塗りの二重の塔、「根本如法塔」が見える。

横川を開いた慈覚大師円仁が天長年間(824-832年)に法華経を書写し、これを如法堂に安置したとされている。以後、如法堂が横川における信仰の中心になったようである。

大正12年(1923年)、如法堂跡に塔を建てるための工事中に経箱が発掘されたという。銅製の箱に金メッキが施され、蓋には「妙法蓮華経」と書かれており、この箱は後に「金銅経箱」として国宝に指定された。

元三大師堂

「横川中堂」の前の参道を東の方向に進むと「元三（がんざん）大師堂」に着く。

ここは天台宗中興の祖とされている慈恵大師良源（元三大師）の住居の跡を継いでいるといわれている場所である。

康保4年(967年)から村上天皇の命により、ここで法華経の論議法要が春夏秋冬に行われたので、「四季講堂」ともよばれている。

元三大師堂「本堂」、本尊として元三大師の画像が祀られている。

また、ここはおみくじ発祥の寺といわれている。今でも、先ず僧侶の前で自分の悩み事を話し、おみくじを授受する。次いでそのおみくじに書いてある内容について10分程度僧侶から教えを受けなければならない。それだけにおみくじ代は高価である。

恵心院

「元三大師堂」の前から南の方向へ数分歩いたところに「恵心院」がある。

ここは恵心僧都の旧跡といわれ、恵心僧都はここに籠もり仏堂修行と著述に専念し、浄土教の基礎を築いたとされている。

「恵心堂」は横川中堂や何となく明るい感じのする元三大師堂から離れた場所にあり、暗い感じがする小堂であるが落ち着いて修行ができる雰囲気に囲まれている。

比叡山行院

「元三大師堂」から東側に歩いて2～3分のところに「比叡山行院」がある。

ここは天台宗の修行道場であり、読経の声が地の底からわき上がるように荘厳に響き渡っている。この付近は観光客も少なく静寂であり、修行道場は周辺の環境によくとけ込んでいる。

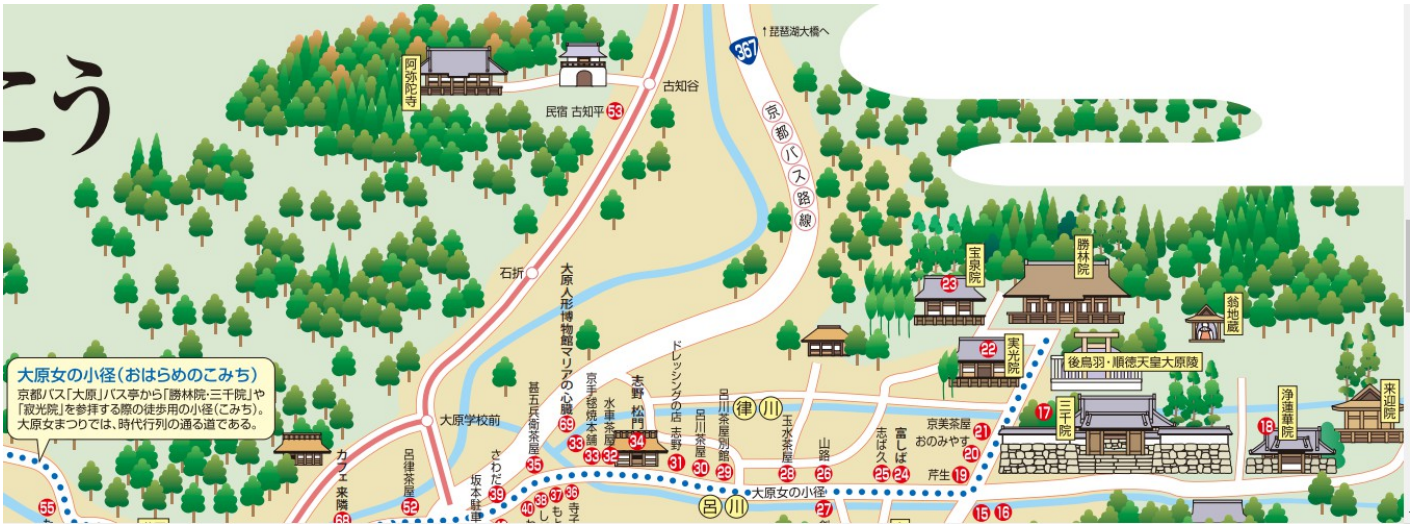
定光院

「比叡山行院」の前から東北方向に坂を15分程度歩いて下ると「定光院」に行き着く。

「定光院」は日蓮上人の旧跡であるといわれており、境内には日蓮上人の銅像が立っている。

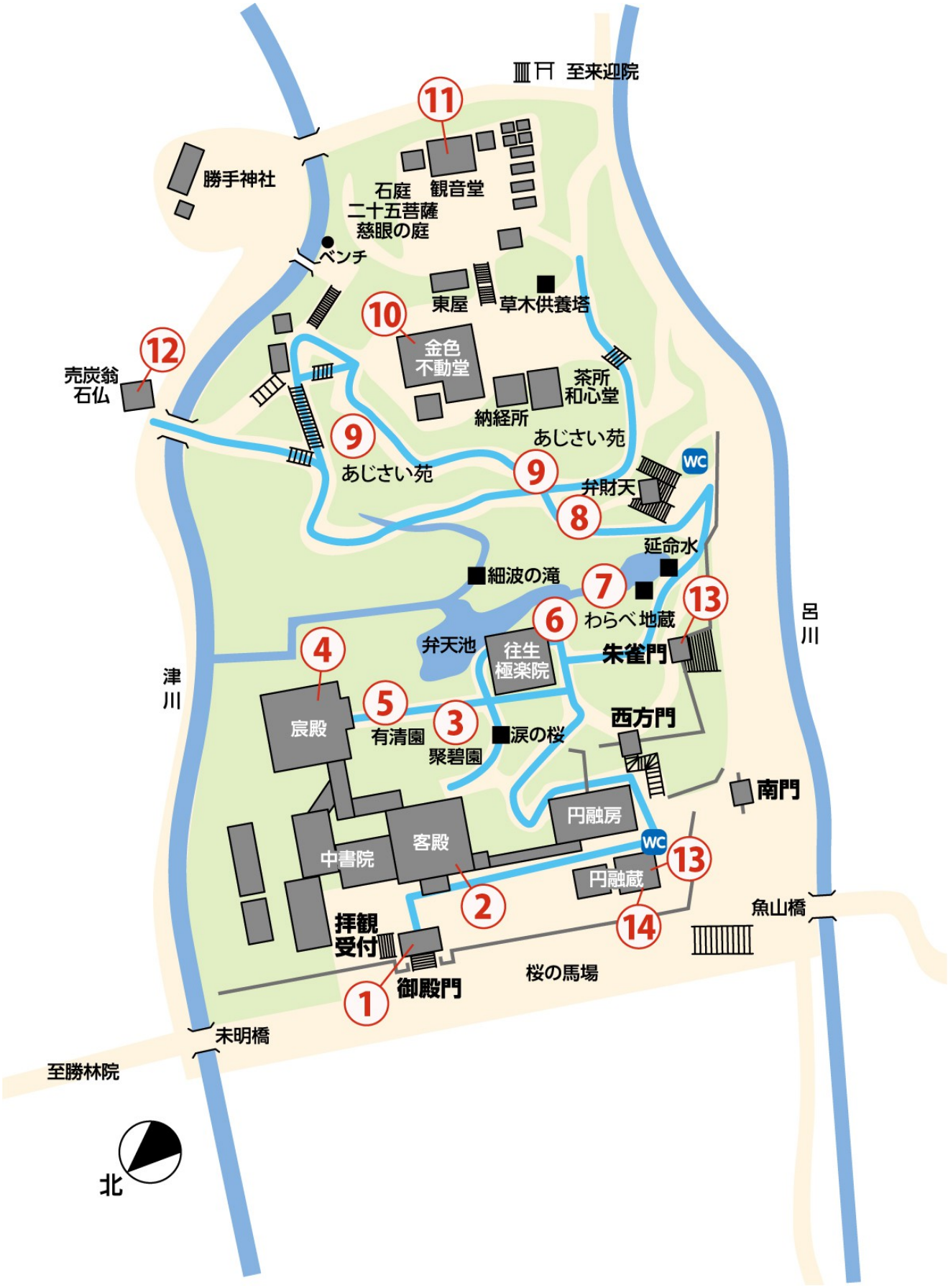
大原の里 散策MAP
寂光院
jyakkouin
宝泉院
housenin
勝林院
shourinin
実光院
jikkouin
三千院
sanzenin
浄蓮華院
jyourengein
来迎院
raigouin
大原女の小径（おはらめのこみち）
京都バス「大原バス停」から「勝林院・三千院」や「寂光院」を参拝する際の徒歩用の小径（こみち）。大原女まつり・大原女時代行列の通る道でもあります。
大原
大原観光保勝会
バスP
出世稲荷神社
syusseinari shrine
梅の宮
高野川
大長瀬町
ここが間違う場所！
三千院方面からお帰りの際に道を間違えやすいのでご注意下さい。バス停へお戻りの場合は「大原女の小径」の看板を右です。
里の駅大原
朝市
ファミリーマート
交番
野村別れ
江文神社
eburi shrine
戸寺
京都大原観光保勝会
TEL：075-744-2148
京都市左京区大原来迎院町81-2

大原の里を歩こう
阿弥陀寺
民宿 古知平
寂光院
大原西陵（建礼門院陵）
大原温泉 源泉
池谷茶屋
桂徳院
みつる工芸
おぼろの清水
わっぱ堂
大原女の小径（おはらめのこみち）
京都バス「大原」バス亭から「勝林院・三千院」や「寂光院」を参拝する際の徒歩用の小径（こみち）。大原女まつりでは、時代行列の通る道である。
阿波内侍の墓
翠月
美遊喜茶屋
大原の里
民宿 大原荘
なつめ
貴生川
石折
大原人形博物館マリアの心臓
甚五兵衛茶屋
京手毬焼本舗
水車茶屋
大原学校前
カフェ来隣
呂律茶屋
さわだ
坂本駐車場


こう
阿弥陀寺
民宿 古知平
古知谷
↑琵琶湖大橋へ
京都バス路線
石折
大原人形博物館マリアの心臓
甚五兵衛茶屋
京手毬焼本舗
水車茶屋
志野
松門
ドレッシングの店 志野
呂川茶屋
呂川茶屋別館
玉水茶屋
山路
富しば
志ば久
芹生
京美茶屋
おのみやす
宝泉院
勝林院
実光院
三千院
地蔵
後鳥羽・順徳天皇大原陵
浄蓮華院
来迎院
大原女の小径（おはらめのこみち）
京都バス「大原」バス亭から「勝林院・三千院」や「寂光院」を参拝する際の徒歩用の小径（こみち）。大原女まつりでは、時代行列の通る道である。
大原学校前
カフェ来隣
呂律茶屋
さわだ
坂本駐車場
大原女の小径
呂川
律川

【『京都駅』（JR等）から】
・京都バス17系統にて　約62分　<時刻表>　<乗り場>

三千院の境内



1・御殿門（ごてんもん）
三千院の玄関口である御殿門は、高い石垣に囲まれ、門跡寺院にふさわしい風格をそなえた政所としての城廓、城門を思わせる構えとなっています。
その石組みは城廓の石積み技術などで名高い近江坂本の穴太衆（あのうしゅう）という石工が積んだもので、自然石を使った石組みは頑強でかつ美しく、時を経ても崩れないといわれています。

2・客殿
西側の勅使玄関（ちょくしげんかん）から続く書院で、大正元年に修補されました。
明治39年、客殿各室には、当時の京都画壇を代表する画家たちの襖絵が奉納され、当時若い世代であった竹内栖鳳、菊池芳文、重鎮であった望月玉泉、今尾景年、鈴木松年といった新旧の画家たちの競演となっていました。
奉納された襖絵は、現在は宝物館である円融蔵に所蔵されており、随時展示替えをし、公開しております。

3・聚碧園（しゅうへきえん）
客殿の庭園、聚碧園は池泉観賞式庭園で、東部は山畔を利用した上下二段式とし、南部は円形とひょうたん形の池泉をむすんだ池庭を形成しています。
江戸時代の茶人・金森宗和（かなもりそうわ・1584-1656）による修築と伝えられています。
聚碧園の隅にある老木「涙の桜」は室町時代の歌僧頓阿（とんあ）上人が詠んだ一首に由来し、その桜は西行法師のお手植えとも、頓阿上人の友、陵阿（りょうあ）上人のお手植えとも伝わり、近年は5月に白い花を咲かせます。
見るたびに袖こそ濡るれ桜花涙の種を植えや置きけん　（頓阿上人）

4・宸殿
宸殿は三千院の最も重要な法要である御懺法講（おせんぼうこう）を執り行うため、御所の紫宸殿を模して、大正15年に建てられました。
　本尊は伝教大師作と伝わる薬師瑠璃光如来（やくしるりこうにょらい）で、秘仏となっております。
また、宸殿では毎年5月30日、三千院門主が調聲（ちょうせい）を勤め、山門（延暦寺）と魚山（大原寺）の僧侶が式衆として出仕し、歴代天皇の御回向である御懺法講が厳かに奉修されます。
雅楽と声明がとけあった御懺法講は、後白河法皇の御代から始められた宮中伝統の法要で、江戸末期までは宮中で行われていたため、「宮中御懺法講」と呼ばれていました。
本殿向かって左、西の間には歴代住職法親王の尊牌がお祀りされており、向かって右の東の間には天皇陛下をお迎えする玉座を設えております。
その玉座の間には下村観山の襖絵があり、大きな虹が描かれていることから「虹の間」とも呼ばれています。

5・有清園（ゆうせいえん）
有清園は宸殿より往生極楽院を眺める池泉回遊式庭園で、中国の六朝時代を代表する詩人・謝霊運（しゃれいうん 385-433）の「山水清音有（山水に清音有り」より命名されました。
青苔に杉や檜などの立木が並び、山畔を利用して上部に三段式となった滝を配し、渓谷式に水を流して池泉に注ぐようになっています。
春には山桜と石楠花（シャクナゲ）が庭園を淡く染め、夏の新緑、秋の紅葉、そして雪景色と季節毎にその色を美しく変えます。

6・往生極楽院
三千院の歴史の源とも言える簡素な御堂です。
平安時代に『往生要集』の著者で天台浄土教の大成者である恵心僧都源信が父母の菩提のため、姉の安養尼とともに建立したと伝えられます。
往生極楽院に祀られている阿弥陀三尊像はお堂に比べて大きく、堂内に納める工夫として、天井を舟底型に折り上げていることが特徴です。
その天井には現在は肉眼ではわかり難いものの、極楽浄土に舞う天女や諸菩薩の姿が極彩色で描かれており、あたかも極楽浄土そのままを表しています。
堂内中心に鎮座する阿弥陀如来は来迎印を結び、向かって右側の観世音菩薩は往生者を蓮台に乗せる姿で、左側の勢至菩薩は合掌し、両菩薩共に少し前かがみに跪く「大和坐り」で、慈悲に満ちたお姿です。
なお、建物は重要文化財、阿弥陀三尊像は国宝に指定されています。

7・わらべ地蔵
往生極楽院南側、弁天池脇にたたずむ小さなお地蔵さまたち。
有清園の苔と一体となってきれいに苔むしており、もう何年も前からずっとたたずんでくださっているようです。
わらべ地蔵と名づけられたこのお地蔵さまたちは、石彫刻家の杉村孝氏の手によるものです。

8・弁財天
往生極楽院を過ぎ、金色不動堂に向かう参道脇に、弁財天が祀られています。
『京の七福神』のうちの一つとなっており、そのほかの『京の七福神』は恵美須（ゑびす神社）、大黒天（妙円寺）、毘沙門天（毘沙門堂）、布袋尊（長楽寺）、福禄寿（護浄院）、寿老人（行願寺）です。

10・金色不動堂
金色不動堂は、護摩祈祷を行う祈願道場として、平成元年4月に建立されました。
本尊は、智証大師作と伝えられる秘仏金色不動明王で、重要文化財に指定されています。毎年4月に行われる不動大祭期間中は、秘仏のその扉は開かれ、約1ヶ月間お姿を拝することができます。

11・観音堂
観音堂内には身丈3メートルの金色の観音像が祀られており、御堂両側の小観音堂には三千院と縁を結ばれた方々の小観音像が安置されています。
平成10年に建立され、観音堂の横に広がる石庭・二十五菩薩慈眼の庭は、補陀洛浄土を模して二十五菩薩を配した庭園です。

12・阿弥陀石仏（売炭翁石仏）
金色不動堂の北、律川にかかる橋を渡ったところに、鎌倉時代の大きな阿弥陀石仏が安置されています。
この石仏は高さ2.25メートルの単弁の蓮華座上に結跏趺座（けっかふざ）する、定印阿弥陀如来（じょういんあみだにょらい）で、おそらく「欣求浄土（ごんぐじょうど）」を願ったこの地の念仏行者たちによって作られたもので、往時の浄土信仰を物語る貴重な遺物です。
またこの場所は、昔、炭を焼き始めた老翁が住んでいた「売炭翁（ばいたんおきな）旧跡」と伝えられることから、この阿弥陀さまをここ大原では親しみをこめて、売炭翁石仏と呼ぶようになったと伝わっています。

炭竈のたなびく煙ひとすじに心細さは大原の里　（寂然法師）

13・朱雀門
往生極楽院の南側にある朱塗りの小さな門で、その昔、極楽院を本堂としていた頃の正門にあたります。
その様式は藤原期の様式とも言われていますが、江戸時代に再建されたものになります。なお、現在開扉は行われておりません。

14・円融蔵（えんにゅうぞう）
平成18年秋に開館した重要文化財収蔵施設で、展示室を備えています。
円融蔵には、三千院開創以来の仏教・国文・国史、門跡寺院特有の皇室の記録や史伝等、中古・中世・近世にわたって書写され蒐集された、典籍文書を多数所蔵しております。
また、展示室には現存最古と言われる往生極楽院の「舟底天井」を原寸大に設え、藤原時代の人々が現世に往生極楽を願い、浄土思想に基づいて描かれた天井画が、赤外線カメラを使った調査により創建当時の顔料のまま、極彩色に復元されました。

律川（りつせん）・呂川（りょせん）
境内の北側を流れる川を「律川」、南側を流れる川を「呂川」と呼びます。
　これは声明音律（しょうみょうおんりつ）の「呂律（りょりつ）」にちなんで名づけられたといわれています。

国宝 阿弥陀三尊坐像（阿弥陀如来像、観音菩薩坐像、勢至菩薩坐像）

平安時代
木造漆箔　像高　阿弥陀如来194.5　観音菩薩132.2　勢至菩薩132.7
明治になって三千院に併合された往生極楽院本堂には、阿弥陀三尊像が安置されている。この三尊像は信者の臨終に際して、阿弥陀如来やその眷属（けんぞく）が極楽浄土から迎えに来られる様子を表現した来迎相である。阿弥陀如来は来迎印を結び台座に坐し、両脇侍は蓮台上に跪坐（きざ）し、向かって右側の観世音菩薩は蓮台を捧げ、左側の勢至菩薩は合掌する。 両菩薩は膝を少し開き、上半身を前屈みにする「大和坐り」といわれる珍しいお姿で、往生者をお迎えするまさにその一瞬を表しているといわれる。 平安時代を代表する三尊像で、国宝に指定されている。

勢至菩薩坐像　　観音菩薩坐像
勢至菩薩（せいしぼさつ）坐像

：合掌し、往生者を迎える姿
ヒノキの寄木造で胎内からは「久安四年」（1148）の墨書が発見された。
観音菩薩坐像（かんぜおんぼさつ）：
往生者を蓮台に乗せる姿

実光院は魚山 勝林院（ぎょざん しょうりんいん）を本堂に頂く僧坊の一つで、応永年間（1394～1428）に宗信法印によって復興された。 かつては当院や宝泉院のほかに、普賢院、理覚院など、多くの僧坊が存在しました。
実光院は本来、現在地の向かい側、大原陵（後鳥羽天皇・順徳天皇陵）がその境内でした。大正8（1919）年、普賢院と理覚院を統合する形で旧普賢院の境内に移転し、現在に至っています。これは、梶井宮門跡第20世・尊快法親王（後鳥羽天皇 第10皇子）の御心によって、旧実光院の庭園に両帝のご遺骨を分散して安置していましたが、本陵として整備するため旧宮内省の命によって移転したのです。
客殿は大正10（1920）年に建てられました。欄間に配置される「三十六詩仙」画像は、江戸中期に狩野派の絵師によって描かれたもので、同様の作品が詩仙堂にも残されています。
客殿の南側に広がる庭園は「契心園（けいしんえん）」といい、江戸時代後期に作庭されたもの。律川より水を引いた心字池を中心とした、池泉鑑賞式庭園です。池を三途の川、対岸の築山を極楽浄土に見立てています。
また、客殿の西側に広がる回遊式庭園は旧理覚院の境内で、実光院と統合されて以来、歴代住職が作庭整備して今日に至っています。借景として大原の山並みを取り入れた、開放的な雰囲気の庭です。庭園の中央に植えられた不断桜は、初秋から翌年春にかけて花を咲かせる、とても珍しい品種です。秋には桜花と紅葉が同時に楽しむことができ、寒さ厳しい冬には雪と桜とを同時に楽しむことができます。
庭園西北に位置する茶室「理覚庵」は、昭和50（1975）年に建てられたもので、建築資材のほとんどが実光院領の山林から切り出して調達されました。山里大原は農業も盛んということもあり、通常は武士のために刀掛けを設ける部分には、農作業に使う鎌が掛けられています。

庭園の中央に植えられた不断桜は、初秋から翌年春にかけて花を咲かせる珍しい品種です。錦秋の季節には、桜の花と紅葉が同時に楽しむことができます。